

社会学とオーラル・ヒストリー

——ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーの関係を中心に

江頭 説子

はじめに

- 1 ライフ・ヒストリーの歴史と現状
- 2 オーラル・ヒストリーの歴史と現状
- 3 ライフ・ヒストリーの意義と課題

おわりに

はじめに

本研究の目的は、社会学の領域において市民権を得つつあるライフ・ヒストリーと、歴史学の領域において一定の市民権を得るまでに至っているオーラル・ヒストリーの関連性について検討することにある。ライフ・ヒストリー、オーラル・ヒストリーともに、その出自は1920年代の都市社会学におけるシカゴ学派のライフストーリーの方法論にたどることができる。

ライフ・ヒストリーの歴史に目を向けると、1940年代後半以降、社会学の領域においては、統計調査を主とする量的研究や構造機能主義がより科学的な理論として主流の位置を占めるようになり、質的研究のひとつであるライフストーリー・インタビュー法によるライフ・ヒストリーは批判を受け、周辺領域に位置するようになった。しかし、1950年代の終わりに、量的研究に対して質的研究に基礎をおく社会学者たちからの最初の反発の声（Mills 1959 [1965] [1995]）をきっかけとして、ヨーロッパを中心にライフ・ヒストリー法リバイバルの動きが起き始めた。その後のライフ・ヒストリーは、大きく分けて実証主義、解釈的客観主義、対話的構築主義の3つのアプローチ、調査者と被調査者の関係の捉え方による立場の違いを内包し、複雑な形で発展してきている。

一方オーラル・ヒストリーは、政治史、労働史、地域史などのように、歴史研究の方法としてフィールドワークの伝統が根づいているところ、また学際的な交流がなされてきた研究領域で発展してきた。日本では特に政治史の領域において発展し、政治学においてはオーラル・ヒストリーとは「公人の、専門家による、万人のための口述記録」（御厨 2002: 5）であると考えられていた。このように対象を限定することは、伝統的な政治史が文書資料を重視する方法論に対して、口述が重要な資料となることを立証するために、必要な立場であった。しかしオーラル・ヒストリーの主要な提唱者の一人である御厨自身が述べているように「この十年で急速に『オーラル・ヒストリー』が

市民権を得たことを考えると、公的体験を有する人のみならず、いわゆる庶民や名もなき人にまで、改めて対象とする人々の背景を広げてよい」（日本政治学会編 2005: iii）と考えられはじめています。対象を「公人」から「市井の人々」に広げると、社会学の領域において蓄積のあるライフ・ヒストリー研究との関係性が高くなっていく。これらのことから、本稿では社会学におけるライフ・ヒストリー研究とオーラル・ヒストリーの関係性について主にあきらかにしていく。

1 ライフ・ヒストリーの歴史と現状

社会学においては、ライフ・ヒストリーとライフヒストリーの二つの表記がある。両者の区別については、明確にされず曖昧に使われている場合が多い。しかし谷は、両者の区別について下記のように言及している。

ライフ・ヒストリーの日本語訳は文字通り「生活史」である。本書でも多くの章がこちらを用いている。しかし、歴史学や民俗学などの分野ではこれが、ある地域や社会層の人びとが生活の中で古くから用いてきた衣食住、用具、無形文化などの歴史という、「地域史」や「社会史」とほぼ同じ意味で使われることもあり、それとの混同を避けるために本書では「ライフ・ヒストリー」をタイトルに選ぶことにした。したがって、本書で「生活史」という場合、それは主として英語の「ライフ・ヒストリー」と互換的に用いられていることをあらかじめお断りしておきたい。それからまた、「ライフヒストリー」と、ライフとヒストリーの間を切らない表記の仕方もある（本書7章などのように）⁽¹⁾が、本書では『新社会学辞典』（有斐閣、1993年）の表記法に準拠してタイトルをつけている。初学者には間を切った方が見やすいと思われることも、選択理由のひとつである（谷 1996:5-6）。

ライフヒストリーと「・なし」で表記されるのは、シカゴ学派の紹介（中野正太・宝月 2003）、桜井らによる一連の研究（中野卓・桜井編 1995、桜井 2002、桜井・小林編 2005、Bertaux 1997 [2003]）である⁽²⁾。筆者は、谷の定義、水野（1986）、質的調査関係の文献（Denzin and Lincoln 2000 [2006] 等）や日本オーラル・ヒストリー学会の設立趣旨でもライフ・ヒストリーと表記していることから、引用以外ではライフ・ヒストリーの表記で統一することにする。

（1）ライフ・ヒストリー研究の系譜

ライフ・ヒストリーは、1920年代のシカゴ学派の生活史研究にその源流をもつ。シカゴ学派の生活史研究の代表的な作品として、トマス&ズナニエツキの『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』（1918-20）、アンダーソンの『ホーボー』（1923）、ショウの『ジャック・ローラー』

(1) 本書7章は、桜井厚論文「ライフヒストリー・インタビューにおけるジェンダー」である。

(2) ベルトーについては、英語で執筆された文献ではlife-historyと表記されているが、翻訳者である小林多寿子が『ライフヒストリーの社会学』（中野卓・桜井 1995）で論文を執筆していることから、ライフヒストリーと訳したと思われる。

(1930) があげられる。なかでも、ショウの『ジャック・ローラー ある非行少年自身の物語』(1930) は、非行少年のライフストーリーをその家族の中に、また社会的文脈に細心の注意をはらって位置づけることにより、非行は病的な性格の結果ではなく、社会的略奪に対する反応であることを強い説得力をもって示した。

しかし、1940年代後半になると、社会学の領域ではより科学的で数量的な分析、抽象的な理論化が求められるようになり、量的研究や構造機能主義がより学問的な理論として主流の位置をしめ、質的研究や生活史研究は注目されなくなった。ところが、1950年代の終わりにミルズが「社会学的想像力」(1959) で「一人の人間の生活と、一つの社会の歴史とは、両者をともに理解することなしには、そのどちらの一つをも理解することができない」(Mills 1959 [1965] [1995] :4) と主張し、量的研究に対して質的研究に基礎をおく必要性を説いた。調査方法論という意味では、1960年代から社会科学における統計調査を主とした量的研究法の優位性が疑問視されると同時に、質的研究法に対する関心が高まっていった。その後も研究者たちは量的な方法と質的な方法の2つの方法をめぐって、長く論争を続けており、それは時には「パラダイム戦争」として描かれている(Punch 1998 [2005] :2)。

ライフストーリー法を用いたライフ・ヒストリーが再び注目を集めるようになったきっかけは、フランスの社会学者ベルトー⁽³⁾ によってもたらされた。当初、ベルトーはフランスやその他の国でも主流の社会学者たちが社会学をより客観的に、より科学的にすることしか考えていなかったため、ライフ・ヒストリーを用いて調査する方法はあまりに「主観的」すぎることを、フランスの社会学的環境ではライフストーリーの利用に対して公然とした敵意のあることを考慮に入れ、英語で論文を発表し、フランスの外で仲間を探したという(Bertaux 1997 [2003] :20)。ケベックでニコル・ギャニオン、イタリアでフランコ・フェラロッチェ、イギリスでポール・トンブソン、アメリカでノーマン・K. デンジンといった研究者と出会い、共同研究をおこなった。そして、1978年の国際社会学会第9回世界会議(1978年 於スウェーデンのウプラサ)の枠のなかで、アドホック・グループ(研究グループ組織化の初期段階)によるライフ・ヒストリー法のセッションを設けたのである。そのセッションには100人以上が殺到し、ジョン・ゴールドソープ、イマニュエル・ウォーラスティンらを集め、成功をおさめ、「ライフ・ヒストリー法リバイバル」が顕在化した。その時の状況についてベルトーはつぎのように述べている。

このまったく予期していなかった成功は、世界中の社会学者のあいだに強い期待、つまりいわくいいがたい期待、社会学的思考をなんらかふたび人間的なものにしたいという願いの存在することをあきらかにした。実際、社会学的思考は、どのような理論的な志向であろうと、認識の場から具体的な男性と女性、歴史性を保持する人(すなわち、歴史の流れに働きかける能力を授けられていながら、歴史のなかに埋もれている人)を排除していたのであった

(3) 1939年生まれ。ハード・サイエンスで教育を受け、航空工学の研究者として来日した経験もある。60年代半ばに社会学へ転向し、ピエール・ブルデュー、レイモン・ブードン、アラン・トゥレーヌらのもとで30年間専任研究員として、七つの調査プロジェクトを主導してきた。1970年代後半から始まった「ライフ・ヒストリー法リバイバル」の旗手の一人である。今日にいたるまでヨーロッパにおけるライフ・ヒストリー研究の第一人者であり、フランス社会学学会会長も務めている。

(Bertaux 1997 [2003] : 21)。

このセッションでの成功に引き続き、ベルトーらは国際社会学会のリサーチ・コミュニティ「伝記と社会」を設立(1981)した。このベルトーの実績について中野・桜井も『ライフ・ヒストリーの社会学』(1995)で言及している。中野が独自に『口述の生活史』を出版したのが1977年だったことから、実証主義的な研究法からライフ・ヒストリー研究へのパラダイム・シフトは、世界同時進行の現象だったのかもしれないとして、「私たちはこの同時代性に驚くとともに、これらが個々別々の動きであったにもかかわらずある一つの共通の特徴をもっていることに気づく。それは今日のライフ・ヒストリー研究の特徴を象徴的に示している」と述べている(中野・桜井 1995: 8)。そこで、日本の社会学の領域におけるライフ・ヒストリー研究について検討していく。

(2) ライフ・ヒストリーとライフストーリー

まず最初に、日本の社会学の領域におけるライフ・ヒストリー、ライフストーリーに関連する主な文献を整理すると表1となる⁽⁴⁾。表1からわかるように、日本の生活史研究の先駆者は中野卓であり、『口述の生活史』(1977)は、生活史研究の金字塔というべき作品となっている⁽⁵⁾。翌1978年には中野らを中心に「生活史研究会」も発足している。しかし、その後中野と桜井が編者である『ライフ・ヒストリーの社会学』(1995)が刊行されるまで約20年の空白期間がある。この空白の20年間には意味がある。(1)「ライフ・ヒストリー研究の系譜」であきらかにしたように、ライフ・ヒストリーは1920年代以降、シカゴ学派の生活史研究にはじまり、第一期隆盛期ともいえる時代をむかえていた。しかし、その後社会学の領域において量的研究や構造機能主義が主流となり、ライフ・ヒストリーは停滞期をむかえた。1980年代の日本においても同様なことが起きていた。1955年から10年に一度実施されてきたSSM調査研究が理論面、技術面ともに発展し、日本の階層構造をあきらかにするうえで大きな成果をあげるなど、量的研究が社会学の主流となり、質的研究への関心が低くなっていったのである。しかし、この間ライフ・ヒストリー研究や質的研究がなされなかったのではなく、質的研究に携わる研究者は、事例の積み重ねを綿々とおこなっていた。中野も多くの生活史研究をおこない、1980年代にも成果を発表しつづけていた。それらの研究をまとめたものが、2003年に『中野卓著作集 ライフ・ヒストリー 生活史シリーズ』として刊行されはじめている。その第一巻配本にあたり武笠はつぎのように述べている⁽⁶⁾。

(4) ライフ・ヒストリー、ライフストーリーの方法論を用いた研究報告等の文献は他に多くあるが、ここでは流れを分かりやすくするために、ライフ・ヒストリー、ライフストーリーの研究法について言及しているものに限定した。

(5) 社会調査の業績のなかにもライフ・ヒストリー法を用いた研究が存在するが、その多くは深いインタビュー調査と表現している。中野は自覚的にライフ・ヒストリーによる研究であると位置づけていることから、本研究では中野の研究を日本の生活史研究の端緒とした。社会調査としてなされた研究を、ライフ・ヒストリー、オーラル・ヒストリーの視点から読みなおす作業が必要であると筆者は考えている。

(6) この記述は、『中野卓著作集 ライフ・ヒストリー 生活史シリーズ』第1巻刊行にあたり発行された会報1に寄せられたものであるが、当時の背景をよく理解できる内容であることから引用した。

社会学界には中野流の生活史にたいする反発や警戒の声は少なくなかった。先生の標榜する生活史が、資料蒐集の方法や目的が曖昧であること、事例研究に終始し理論化・普遍化への道がほとんど示されていないこと、それが読み物以上の学問的な有効性を持ちうるかどうかへの疑問等々、ごく少数の若手研究者を除けば、当時の社会学界では中野生活史にたいする反発と黙視が支配的であった。（中略）この時期の先生は否定的な批判にたいし理論闘争を挑むよりは、生活史の実例を提出することに力を注いだ観がある（武笠 2003:1-2）。

表1 ライフ・ヒストリー、ライフストーリーの研究法に関する文献一覧

1977	中野卓『口述の生活史』
1978	*国際社会学会第9回世界会議（スウェーデン，ウブラサ）
1981	*国際社会学会リサーチ・コミュニティ「伝記と社会」設立
1986	水野節夫「生活史研究とその多様な展開」（青井和夫『社会学の歴史的展開』）*1
1995	中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』
1996	谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』
1997	*ベルトー『ライフストーリー』原書
2002	桜井厚『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』
2003	中野卓『中野卓著作集生活史（ライフ・ヒストリー）シリーズ』〔全12巻〕配本始まる *ベルトー『ライフストーリー』翻訳（小林多寿子訳）
2004	山田富秋訳，ホルスタイン&グブリアム『アクティブ・インタビュー——相互行為としての社会調査』（1995）
2005	桜井厚・小林多寿子編『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』
2005	山田富秋編著『ライフストーリーの社会学』
	*1 本書は生活史研究の綿密なレビューであり，理論化への前段階と考えられる。 筆者作成

ライフ・ヒストリーの理論化という意味では、1980年代は空白の期間かも知れないが、この時期は事例研究を積み重ねることにより、1990年代後半以降のライフ・ヒストリーの理論化へとつながった時期であると筆者は評価する。それが成果としてあらわれたのが、ライフ・ヒストリーの方法論に日本で初めて正面から取り組んだ『ライフヒストリーの社会学』（中野・桜井編 1995）である。しかし、『ライフヒストリーの社会学』は、個々の研究者がライフ・ヒストリー法をもちいて何をあきらかにすることができるのかについての論文集であり、残念ながらライフ・ヒストリーの方法論を明確にできていない。なぜなら、執筆するにはライフ・ヒストリーを用いた研究をめざすという共通点はあるが、問題とする領域、分析方法、聞き手と語り手の関係性の捉え方等について異なった考え方をもっているからである。たとえば、編者の中野と桜井をとりあげてみると、中野は歴史社会学者であり、桜井は社会問題の社会学者であるという立場の違いがあり、ライフ・ヒストリーを用いる研究の意義についても異なった考えをもっている。中野は、「口述の語りが過去の事実をそのまま表したのではないにしても、歴史の更新をせまる力をもつ点に注目する」のに対して桜井は、「語りの独自性を主張することによって、語りの多次元的な構成に着目する必要性」（中野・桜井 1995:11）を説いている。桜井は『ライフヒストリーの社会学』では、被調査者の主観性を重

視する（中野・桜井 1995:212）という桜井の考えを示唆するにとどめ、『インタビューの社会学』（桜井 2002）で自論を展開している。桜井（2002）のI章は「ライフストーリーとは何か」であり、谷（1996）の序論も「ライフ・ヒストリーとは何か」と同じタイトルとなっている。ここでは二人の研究者のライフ・ヒストリーについての考え方を比較することにより、ライフ・ヒストリーとは何かについてあきらかにしていく。桜井と谷のライフ・ヒストリーについての概念を整理したのが表2となる。

桜井は、ライフヒストリー法の代表的なアプローチとして①実証主義、②解釈的客観主義、③対話的構築主義、の3つがあるとする（桜井 2002:9）。この3つのアプローチをもとに考えるならば、桜井は③対話的構築主義、谷は①実証主義の立場をとっている。ライフ・ヒストリーについて谷は、「個人の一生の記録、あるいは、個人の生活の過去から現在にいたる記録のこと」（谷 1996:5）であり、その方法論として「一つの事例から策出された仮説を他の事例と突き合わせ、強化、修正、棄却、あらたな発見などを繰り返しながら、より信憑性の高い仮説に仕上げていく」（谷 1996:23）ものであるとする。桜井もライフ・ヒストリーとは、「調査者がさまざまな補助データを補ったり、時系列に順序を入れ替えるなどの編集をへて再構成される」（桜井 2002:9）としている点では共通している。異なるのは、桜井が「調査の対象である語り手に照準」（桜井 2002:9）をあてる点にある。さらに桜井は、ライフ・ヒストリーからライフストーリーへの方法論的展開が必要であると主張する。ライフストーリー研究は、「口述の語りそのものの記述を意味するだけでなく、調査者を調査の重要な対象であると位置づけている」（桜井 2002:9）、つまり「調査者と被調査者の社会関係」や「インタビューの相互行為のあり方」に着目（桜井 2002:9）するところにその特徴がある。そして、「語ることは、過去の出来事や経験が何であるかを述べること以上に＜こゝで語り手とインタビュアーの双方の『主体』が生きる＞」（桜井 2002:31）のである。つまり「インタビューの場こそが、ライフストーリーを構築する文化的営為の場である」（桜井 2002:31）と捉えている。

ライフストーリーに焦点をあてる研究法は、山田ら（2005）に引き継がれている。山田はなぜ、ライフ・ヒストリーではなくライフストーリーなのかについて、「個人によって語られた物語が、その人自身に帰属するというよりはむしろ、それが語られた相互行為の文脈に依存すると考えるからである」（山田 2005:3）とし、社会構築主義の立場をとることを明確にしている。さらに山田は、「私たちは回答者から得られた回答について、その背後にあると想定される客観的な社会構造や歴史的事実と照らして真偽をチェックしたりする必要はないと考える」（山田 2005:3）とし、ライフ・ヒストリーとの一線を画している。

現在の日本の社会学においては、桜井、山田らの精力的な研究の蓄積と公表、日本オーラル・ヒストリー学会の会長を桜井が務めていること等から、社会構築主義にもとづくライフヒストリー研究が研究の流れを牽引しているかのように思われる。さらに、ベルトーの『ライフストーリー』（Bertaux 1997 [2003]）が翻訳されたことにより、ライフストーリー研究への注目が高まってきている。しかし、ベルトーは桜井、山田らと同じように「ライフストーリー」という概念を用いているが、実はその中身は異なっている。桜井のライフヒストリー法の3つのアプローチで考えるならば、ベルトーは②解釈的客観主義の立場をとっている。

表2 ライフヒストリー（桜井）とライフ・ヒストリー（谷）

	ライフヒストリー（桜井）	ライフ・ヒストリー（谷）
目的・立場	対話的構築主義 →ライフヒストリーからライフストーリーへの方法論的展開の必要性を主張 →語りとしての生（語り）への着目 ライフストーリーを中核とする言語的表象であって言語行為としての文化的慣習、聞き手との関係や社会的文脈によって左右されるもの 調査対象者：権力や富から遠い周縁人、自らの生を語ることを抑圧されたり、支配的な文化から周縁化され無視されてきた人たち	質的調査と量的調査の対抗的な相互補完関係を社会調査の望ましいあり方と考える実証的社会学 →生活構造変動分析としてのライフ・ヒストリー法の可能性に着目 →個性記述と法則定立の両方向に開かれたものとする考え方に立つ 法則定立とは：個人史と体制史のダイナミズムの規則性の発見 →ライフ・ヒストリーの資料的価値
定義	調査の対象である語り手に照準し、語り手の語りを調査者がさまざまな補助データを補ったり、時系列に順序を入れ替えるなどの編集をへて再構成される	社会的存在としての個人の歴史をあきらかにする個人の一生の記録、あるいは、個人の生活の過去から現在にいたる記録のこと 例) 口述史、自伝、伝記、日記 →最近では口述史の聞き取りがライフ・ヒストリー法のメジャーな方法となっている
特徴	調査者－被調査者の社会関係、インタビューの相互行為のあり方、解釈や分析の方法の独自性を主張。語ることは、過去の出来事や経験が何であるかを述べること以上に「いま－ここ」で語り手とインタビュアーの双方の「主体」が生きていること →インタビューの場こそが、ライフストーリーを構築する文化的営為の場	時間的パースペクティブ（時間の奥行き）のもとで個人の生活を把握しようとするのが独自の視点「生活構造」の持続・変容過程としてとらえる →生活構造変動分析 3つの特性①時間的パースペクティブを内蔵しているの で対象を過程として把握することが可能 ②全体関連的な対象把握を志向 ③主観的現実深く入り込み、内面からの意味把握が可能
基本的発想		
方法論	ナラティブ分析 語りの一定の様式への着目 全体社会の支配的言説＝マスター・ナラティブ 特定のコミュニティ内での特権的な地位をしめる 語り＝モデル・ストーリー 言語が、人々の動機をつくりだし行為に導く機能を持つことへの着目 技法を客観化することを意味した「信頼性」から手続きの「透明性」へ 分析の視点「内的一貫性」	「仮説の策出」、「仮説検証」、「類型構成」 →事例の代表性よりも典型性が要求される 典型性の追究：一つの事例から策出された仮説を他の事例と突き合わせ、強化、修正、棄却、新たな発見などを繰り返しながら、より信憑性の高い仮説に仕上げていく*1

*1 質的調査のこの過程を、ある人は「飽和過程」と呼び、また他の人は「分析的帰納法」とか「グラウンディッド・セオリー・メソッド」などと呼んでいる。いずれも質的調査におけるデータと仮説の間の十分な往復運動が主張されている点で意味するところは重なっている（谷 1996:23）

筆者作成

ベルトーがライフストーリーという言葉を用いた理由は、ライフ・ヒストリーが、一人の人によって生きられたヒストリー「l'histoire vécue」と、研究者の依頼で、個人の歴史のある時期に語られるストーリー「le récit」の間に区別をつけない不都合をさけるためであった（Bertaux 1997 [2003] :31）。この生きられたヒストリーと語られるストーリーの違いを区別することは本質的なものであり、＜リアリスト＞と＜アンチリアリスト＞が対立する現代の論争のもととなっている（この論争については後述する）。これだけでなく、ライフストーリーの利用には、社会学者の多くが様々な疑問を抱いている。ベルトーの指摘によると、「インタビューとライフストーリーを区別するものは何か？主体が話すことを信頼できるのか？ライフストーリーは、生きられた経験の主観的な再構成とはちがうものなのか？客観的な内容をもつものなのか？主体によって提起される社会的コンテクストの描写にはどんな価値があるのか？」等である（Bertaux 1997 [2003] :32）。複雑で多様な多くの疑問は、どのような認識論を基本的にもつのかによって出てくる答えも多様になることから、ベルトーは一つの明確な方向に限定するために、エスノ社会学的なパースペクティブを用いる。エスノ社会学のエスノは、エスノグラフィ的な伝統から着想されたものであるが、ベルトーはエスニシティの現象を指すのではなく、それぞれの下位文化を発達させつつある社会的世界が一つのおなじ社会のなかで共存することを指すものとしてとらえている（Bertaux 1997 [2003] :38）。具体的には、ライフストーリーの収集を＜繰り返し＞おこなうことにより、それぞれのケースの個別の実態を超えて、仮説を確認し、調査者によって洗練されたモデル、つまり一般性の価値をもつモデルの飽和にいたることが可能になるというのである（Bertaux 1997 [2003] :57）。ベルトーは、実際にパン屋の（妻のライフストーリーを含む）60人以上のライフストーリー、15人以上の製パン労働者のライフストーリーを収集することにより、＜飽和のプロセス＞を確認し、日常のプロセスの根底にある社会構造的関係のパターンをあきらかにした（Bertaux 1997 [2003] :190-215）。桜井、山田らがライフストーリーが語られる場に深く関与し、分析していく社会構築主義の立場をとるのにたいして、ベルトーは構造主義の立場をとっている。つまり、ベルトーはライフストーリーを＜繰り返し＞収集していくことにより、パターンの構造と論理を理解し、それらの矛盾を指摘し、そして歴史的時間をつらぬくダイナミクスをあとづけるのである（Bertaux 1997 [2003] :90）。

ライフ・ヒストリーの現状を簡単にまとめると、3つのライフ・ヒストリー（ライフヒストリー）と2つのライフストーリーが存在することになる。3つのライフ・ヒストリーとは①実証主義、②解釈的客観主義、③対話的構築主義であり、2つのライフストーリーとは、①構造主義（エスノ社会学的パースペクティブ）、②社会構築主義である。このように多様な立場、主張が存在しているということは、ライフ・ヒストリーの理論化・普遍化への道がすすめられていることを意味しているともみられる。つぎに、オーラル・ヒストリーについて検討していく。

2 オーラル・ヒストリーの歴史と現状

（1）世界各地におけるオーラル・ヒストリー

オーラル・ヒストリーの歴史は、社会的、政治的、文化的な影響、アカデミックな領域で学際的な交流があるかないかの影響を受け、地域により異なる形で発展してきている。そこでまず、オー

ラル・ヒストリーの第一人者であるポール・トンプソン⁽⁷⁾の記述を元に（Thompson 1978 [2002]），地域を北アメリカ，スカンディナヴィア諸国とイギリス，その他のエリアの3つにわけ，それぞれの歴史を概観する。地域別にオーラル・ヒストリーの歴史についてまとめたのが表3である。

北アメリカのオーラル・ヒストリーの発展には4つの特徴がある。まず，オーラル・ヒストリーが発展したきっかけが1920年代のシカゴ学派の影響にあるにもかかわらず，現在のオーラル・ヒストリーと関連があるのは人類学の領域における研究の蓄積にあること。つぎに，人類学における先駆的研究があったにもかかわらず，現代におけるオーラル・ヒストリーは政治史において発展してきたこと。さらに，オーラル・ヒストリーが北アメリカ先住民史，黒人史，民俗学，そして女性史で活用されたこと。そして，現在のオーラル・ヒストリーは思索的になり，他の分野との交流を深めていることである（Thompson 1978 [2002] :107-114）。

表3 オーラル・ヒストリーの歴史の国際比較

オーラル・ヒストリーをOHと略して表記

北アメリカ	1920年代	都市社会学におけるシカゴ学派：ライフ・ストーリーの方法論に関心をもち，発展させた →シカゴ学派は，ライフ・ストーリー研究から影響をうけたにもかかわらず，統計的分析と一般的な抽象理論を主とする社会学の専門主義の虜となってしまった →放送ジャーナリストのスタッズ・ターケル，クリフォード・ショー研究所はライフ・ストーリーを継続的に収集
	1930年代	現在のOHと関連があるのはアメリカ人類学 →北アメリカ先住民やメキシコを調査した人類学者たちが心理学や社会学の発展を目の当たりにし，ライフ・ヒストリーによる方法論を人類学的研究に取り入れた 例) オスカー・ルイス，シドニー・ミンツ ニューディールの時期，政府の援助で失業対策として始められた試み →労働者，西部への入植者等々，たくさんのライフ・ヒストリー・インタビューを合衆国中から収集・先駆的研究があったにもかかわらず，現代におけるOHの発展は他の方面から起こった →OHは政治史において発展した
	1948	コロンビア大学の歴史家アラン・ネヴィンズ：歴史記録の現代的方法として，アメリカの生活で重要な人々の回想を録音し始めたときに確立された*1
	1970年代	OHの方法論が北アメリカ先住民史，黒人史，民族学で復活
	1974	カナダ・オーラル・ヒストリー協会（1200人の会員所属，10万時間インタビュー収集、100万頁をこえる書き起こし，1800のコレクションが350カ所に保存）
	1980年代 1990年代	女性史での活用 言語学者，心理学者『ナラティブとライフ・ヒストリー誌（Journal of Narrative and Life History）』『ナラティブによる人生研究（The Narrative Studies of Lives）』発行 ロン・グリーンリー**の影響を受け，アメリカのOHは思索的になり，他の分野との交流を深めている

(7) 1935年生まれ。オックスフォードのコープス・クリスティアー・カレッジでイギリス近代史を専攻。戦後のイギリス社会学の発展に大きな役割を果たしたエセックス大学創立と同時に，社会学の社会学史講師として就任（1964年29歳），同大学教授に昇格（1988年53歳）。1970年頃にオーラル・ヒストリー運動が起こると，ヒストリー・ワークショップ運動を率いていたラファエル・サミュエルらとともに雑誌『オーラル・ヒストリー』を創刊し（1970），オーラル・ヒストリー協会の創立（1973）にも加わった。

スκανディナヴィア		ヨーロッパで最もOHが発達したのは、スκανディナヴィア諸国とイギリス
	1830年代	OHの起源：19Cにおける組織的な民話の収集 フィールドワークに直接関わった史料館がフィンランドに創設され続いてスウェーデンに史料館が作られる
	1870年代	ウプサラ大学の学生：消滅しつつある言葉と表現を収集するために方言協会を作る →1890この収集は、国民規模の組織的なインタビュー調査にまで発展
	1914	スウェーデン議会の財政援助を得て、方言と民話研究所創立
	1935～	→録音機器を定期的に使うようになる。ストックホルムでは、ノルディック博物資料館の記憶記録課が今やコンピュータ化された情報サービスを提供 (1920年代から続いている定期的コンテストにより集められた論文と、論文の著者たちのOHインタビューも含む)
	1950年代	ノルウェー人の歴史家エドワード・ブルの史記による民俗学的収集調査が都市や産業地帯の人々にも広がる
	1970年代	他の民族学者たちがブルらの調査を長期の社会変動研究に使うようになる
	1978	工場労働者の歴史運動も、スウェーデン人の作家スヴェン・リンドクヴィストの画期的な本『君の立っているところを掘ってみよ』と、同名の巡回展によって始まる
イギリス		中心：リーズ大学に基盤を置いた方言調査とシェフィールド大学のイギリスの文化的伝統と言語センター
	1930	アイルランド政府は民話収集を援助し始める→1935：民話研究所設立
	1945	労働党政府成立→労働者階級が力を得て、さらに戦後の長期的好況から民衆が自信を得たことによりイギリス国内に変化がおきる→労働史への関心の急速な高まり
	1951	スコットランド：エディンバラ大学のスコットランド学部門によって組織的な収集開始 →ゲール語と文学だけでなく社会的資料および英語での資料も収集し始める しかし戦後の政治変化のためにイギリスにおいてOHの復活が遅れた →帝国の崩壊：植民地だったアフリカの国々は独立し、独自の歴史を書く必要が出てきた
	1950年代	調査地において自ら口述資料の収集開始
	1955	ブリティッシュ・ライブラリー設置*
	1956	ジョージ・ユアート・エヴァンス『干し草を刈り取る仲間に聞いてみよう』 →この農村研究は、今日のイギリスのOH運動における最初の宣言ともいえるもの
	1957	ピーター・タウンゼント『老人の家族生活』 リチャード・ホガート『読み書き能力の効用』→労働者階級の会話と口述伝承の考え方の様式を分析
	1960年代	社会史への関心が広がると同時に労働者階級の自伝を書こうとする情熱が見られるようになる
	1962	ブライアン・ジャクソンとデニス・マーズデン『教育と労働者階級』 →労働者階級の個人的記憶を効果的に使った研究
	1963	トムソン『イングランド労働者階級の成立』 学際的試みをおこなった1960年代の新設大学と、しだいに社会分析における歴史的側面に 関心をもつようになった社会学の急速な発展のなかで、社会学と歴史学の融合が起こった →OHの可能性は、サフォーク村の人々から録音したテープをもとに、文学、歴史そして 社会学の領域にまたがるロナルド・ブライスの『エイコンフィールドーあるイギリスの 農村のポートレート』から広がる
	1968	テア・ヴァインとトンブロン：1918年以前の家族、労働、共同体等の全国的調査、エセック クス大学で開始
	1978	工場労働者の歴史運動も、スウェーデン人の作家スヴェン・リンドクヴィストの画期的な

	<p>1974</p> <p>1973</p> <p>1970</p> <p>1990年代</p>	<p>本『君の立っているところを掘ってみよ』と、同名の巡回展によって始まる</p> <p>→OHはイギリスで急速に成長</p> <p>社会学者ロバート・ムーア『炭坑夫，説教師，政治』→口述資料の利用</p> <p>「オーラル・ヒストリー協会」設立 6年間に会員600人→1990年代1000人</p> <p>会誌『オーラル・ヒストリー』は国際的に読まれている</p> <p>新しいプロジェクトは、最初から社会史を扱うもので、政府の調査評議会から財政援助を受け社会学の影響を強く受けていた</p> <p>（こうした変化以前における重要なステップ＝軍事史「帝国戦争博物館」音声資料部）</p> <p>OH運動の成長は、現代政治史，労働史，地域史といった，少なくとも口述史料を使ったフィールドワークの伝統の中で，少数派であり続けた分野の歴史で新たな活動を生じさせた都市における地域史プロジェクトが盛んに</p> <p>研究基金の削減が続いていることによる困難はあるが、依然として強力な潮流をなしている</p> <p>→歴史学だけでなく，社会学，人文地理学，カルチュラル・スタディーズの分野で，引き続き実り豊かな研究成果を出している→社会史中心</p> <p>政治家や官僚といった“公人”エリート層へのインタビューは，イギリスの場合主流ではない</p> <p>→一部政治史の研究者により始まる＝ロンドン大学現代英国政治研究所（ICBH）</p>
<p>南米</p> <p>メキシコ</p> <p>ブラジル</p> <p>オーストラリア</p> <p>東南アジア</p> <p>日本</p> <p>中国</p> <p>共産圏</p> <p>イスラエル</p> <p>南アフリカ</p> <p>イタリア</p>	<p>80年代～</p> <p>1970年代</p>	<p>活発で多様性あり</p> <p>社会運動，政治，文化に関する録音を進めてきたナショナル・オーラル・ヒストリー・プログラム</p> <p>心理学者エクレア・ボジ，現在のリオにおける政治史プログラム</p> <p>→サン・パウロ「人々の博物館」：OHへのマルチメディアの使用</p> <p>独自の協会設立（地域史研究者，社会史家，アボリジニの人類学者等）</p> <p>シンガポールをはじめとする国々で公立のOH史料館あり</p> <p>労働史や女性史そして戦争の犠牲者に関する研究はあるけれども，オーラル・ヒストリーへの情熱は，学者の間でも民間の人々の間でも低かった。おそらく，権威的な社会では，近現代史の暗い部分に直面することに積極的になれなかったのだらうと理解できる</p> <p>共産党政府の関心の有無の影響を受ける</p> <p>一般的に，録音されたOHはほとんどなかった 例外）ポーランド，キューバ</p> <p>→共産主義の崩壊：記憶を述べるのが自由になり「回想運動」始まる。</p> <p>アカデミックな分野でも，内外を問わずOHは広がり，共産主義下での日常生活に関する生活史研究が積み重ねられている</p> <p>（記録文書：一定程度以上には信頼できない，歪められたものだった）</p> <p>ファシズム下におけるユダヤ人コミュニティの組織的破壊のあとに，あらゆる証人から口述の証拠を集めることは国家的かつ文化的な存続をかけた闘争の一部</p> <p>→エルサレムのイヤド・ヴァシム史料館，ワシントンのホロコースト記念博物館等</p> <p>アパルトヘイト下における経験や抑圧された生活を記録する重要な方法として成長</p> <p>→1997～98国家による「真実委員会」</p> <p>パルチザンの研究をする地方センターのネットワークが現在のOHの起源の一つとなる</p> <p>学際的なOHの流行：社会学者フランコ・フェラロッチィ：ローマのスラムや貧しい町の研究</p> <p>アレサンドロ・ポッターリ：テルニにおける製鉄業者たちの文化に関する解釈</p> <p>→米：ケンターキー鉱山労働者と比較，考察</p> <p>ピエモンテとトリノの農民，労働者，女性達を対象に一連の社会史研究をおこなう</p> <p>→トリノのグループから伊のOH研究誌『口述史料』誕生</p>

オランダ	1962	中心的課題：ファシズムの記録を残すこと
スペイン		現代政治史家、国際社会史研究所、オランダ放送との間でのよく組織された連携によって OHは発展し、結果的にオランダのOHが非常に幅広いものとなった
ドイツ		OHの発展はフランコによる長期間の統治が終わるまで待たねばならなかった
フランス		OHの発展遅れる：ナチズムの影響→1980年代地域史研究プロジェクト始まる
		OHの発達が遅れただけでなく、OH運動が支持されにくい状況にある

* 1 コロンビア大学資料館：50周年を記念して、抜粋集のCDを発行、7000の証言、70万頁もの書き起こしとして保存。世界最大のコレクションといわれている。

<コロンビア大学オーラル・ヒストリー・リサーチ・オフィス>毎年2500人を超える学者、研究者によるOHコレクションの利用実績あり。OHの記録を利用して、1千冊以上の本、百を超える論文が書かれ、引用率も高い。ネヴィンズが録音を初めてから20年間は、コロンビア大学のプロジェクトがアメリカにおける「オーラル・ヒストリー」だった。

* 2 ロン・グリーンリ：現在コロンビア大学のプログラムを指揮し、1980年に『インターナショナル・オーラル・ヒストリー』を創刊。人類学的視点とヨーロッパのオーラル・ヒストリーを紹介している。

* 3 ロンドン大学ブリティッシュ・ライブラリー：1970年代以降一連の社会史研究者による聞き書きを収蔵し始める。1980年代以降、地方史、女性史、民族史の領域で、オーラル・ヒストリーの活用が積極的になるにつれ、専門のキュレーター（学芸員）が置かれるようになった。

Thompson 1978 [2002] をもとに筆者作成

スカンディナヴィア諸国の特徴は、オーラル・ヒストリーの起源が19世紀における組織的な民話の収集にはじまり、その収集が国民規模の組織的なインタビュー調査にまで発展し、史料館や研究所が設立されたことにある。さらに民俗学的収集調査が都市や産業地帯の人々にも広がり、長期の社会変動研究や、工場労働者の歴史運動にも使われるようになったという経緯がある。スカンディナヴィア諸国での運動の影響をうけ、複雑な形でオーラル・ヒストリーが運動として発展したのがイギリスである。アイルランドやスコットランドでは、民話の収集が組織的に行われたが、イギリスにおいてはオーラル・ヒストリーの復活が遅れた。その背景には、戦後の政治変化の影響があった。変化の一つは、イギリス国外で起きた。帝国の崩壊により植民地だったアフリカの国々が独立し、それらの国々が独自の歴史を書く必要がでてきたことから、自ら口述史料を収集し始めたのである。一方イギリス国内では、1945年に労働党政府が成立したことにより、労働者階級が力を得て、労働史への関心が高まり、1960年代には社会史への関心が広がると同時に、労働者階級の自伝を書こうとする新しい情熱が見られるようになった。さらに特徴的なこととして、学際的な試みをおこなった1960年代の新設大学と、しだいに社会分析における歴史的側面に関心をもつようになった社会学の急速な発展のなかで、社会学と歴史学の融合がおき、オーラル・ヒストリーはイギリスで急速に成長していった。イギリスにおけるオーラル・ヒストリーの成長は、現代政治史、労働史、地域史といった、少なくとも口述史料を使ったフィールドワークの伝統の中で、さまざまな理由から少数であり続けた分野の歴史において新たな活動を生じさせたことに特徴がある。現在は、研究基金の削減が続いていることによる困難はあるが、依然としてオーラル・ヒストリーは強力な潮流をなしており、歴史学だけでなく、社会学、人文地理学、カルチュラル・スタディーズの分野で、引き続き実り豊かな研究成果をだしている (Thompson 1978 [2002] :121-129)。

南米、アジア、アフリカ、スカンディナヴィア諸国とイギリス以外のヨーロッパの国々のオーラル・ヒストリーの歴史の特徴としては、戦争や政治、民族、宗教的な抑圧下での生活を記録する必要性を背景に発達してきたことがあげられる (Thompson 1978 [2002] :114-121)。

（２）日本におけるオーラル・ヒストリー

ここで筆者が特に注目するのは、トンプソンによる日本に関する記述である。トンプソンは、「日本では、労働史や女性史そして戦争の犠牲者に関する研究はあるけれども、オーラル・ヒストリーへの情熱は、学者の間でも民間の人々の間でも低かった。おそらく、権威的な社会では、近現代史の暗い部分に直面することに積極的になれなかったのだろうと理解できる」と述べている（Thompson 1978 [2002] :115）。日本においては、オーラル・ヒストリーへの情熱は、本当に低かったのだろうか。

日本におけるオーラル・ヒストリーの歴史についてまとめたのが表4である。日本のオーラル・ヒストリーの発展には大きくわけて、政治史、生活史、労働運動史の3つの潮流がある。これら3つの領域においてオーラル・ヒストリーがどのように捉えられてきたかについてみてみると、オーラル・ヒストリーという名称を使い、オーラル・ヒストリーの定義をおこなっているのは政治史においてのみとなっている。生活史では、「ライフ・ヒストリー」と表現し、労働運動史においては「聴き取り」、「聞き取り」と表現している。しかし、その中身を詳しく見てみると、口述による資料をもとにした歴史研究の実践がおこなわれていたことから、本研究では生活史、労働運動史における研究をオーラル・ヒストリーとして位置づけて検討することとした。

表4 日本におけるオーラル・ヒストリーの歴史

19C末	インタビュー記録はまずはジャーナリスティックな形で出始めた 例) 雑誌「太陽」
1920年代	吉野作造「明治文化研究会」
1940	「憲政史編纂会」
1940-50	大蔵省財政金融事情研究会「戦後財政史口述資料」
1950年代	国民的歴史学運動起きる
1960年代	「木戸日記研究会」、「内政史研究会」
1968	升味準之輔『日本政党史論』第4巻（「内政史研究会」の談話速記録を活用）
1969	伊藤隆『昭和初期政治史研究』
1971	～72中村隆英『現代史を創る人々』（「内政史研」「木戸研」+経済人へのインタビュー）
1977	中野卓『口述の生活史』
1979	升味準之輔『日本政党史論』第5巻
1978	「生活史研究会」発足（中野ら）
1981	大原社会問題研究所（以下、大原とする）「産別会議と全労連の成立および運動の展開に関する基礎的資料の修正と実証的研究」の研究プロジェクト（代表・早川征一郎）発足
1984	宮本常一『忘れられた日本人』（宮本の一連の作品）
1985	大原「戦後社会運動研究会」発足
1986	御厨貴OH研究を始める J I L P T 「戦後の労働政策の変遷と労働運動に関する研究会」発足
1989	J I L P T 「戦後労働政策の変遷と労働運動に関する研究会」ヒアリング記録（聴き取りと表記） 大原「戦後社会運動資料の復刻に関する調査研究プロジェクト」（代表・五十嵐仁）発足
1992	J I L P T 「戦後労働組合運動の証言研究」開始
1993	大原『証言 産別会議の誕生』 中村隆英『昭和史（全2巻）』 尾高煌之助『企業内教育の時代』
1994	吉田健二「雑誌『機械工の友』と『機械工の知識』『社会新聞』と『社会タイムス』飯島博氏に聞く」
1995	「戦後政策回顧研究会」発足（東京都立大学法学部）→OHプロジェクトの開始 ～96牧原出『内閣・官房・原局-占領終結後の官僚制と政党』

1997	「戦後政策回顧研究会」を母体として政策研究大学院大学政策情報プロジェクト設置 →伊藤隆同大学教授就任, 御厨貴同大学客員教授就任
1998	政策研究大学院政策情報プロジェクト編『政策とオーラルヒストリー』
1999	御厨貴同大学教授に移籍 水谷三公『日本の近代13 官僚の風貌』 J I L P T 「資料シリーズNo.94戦後労働組合運動の歴史—分裂と統一—『太田薫元総評議長 (故人)』証言」
2000	→文部科学省の拠点形成プログラムによりC.O.E.オーラル・政策研究プロジェクトとなる 同プロジェクトは5年という期間のうちに, 主に政治家, 官僚を中心に, 行政, 法曹, 経済, 労働, 海外進出, 阪神淡路震災, 沖縄問題などで150人以上, 1000回あまりのOHを蓄積し成果が刊行されている 大原『証言 産別会議の運動』
2002	御厨貴『オーラル・ヒストリー』 東京大学先端科学技術研究センター (以下, 東大先端研とする) は, 文理融合型研究を特色の一つにすることを目的として, 独立法人化立ち上げと同時に附置研究所に昇格
2003	御厨貴: 東大先端研教授に移籍 →政策研究大学院での蓄積を受ける形で東大先端研を中心にOHプロジェクトが生まれ, 「オーラルヒストリー協会準備事務局」が設置される 日本オーラル・ヒストリー学会設立
2004	日本政治学会の『年報政治学』の特集として「オーラル・ヒストリー」を設定 (2005年発行) 保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』
2005	「公共政策学会年報研究会」を初めとする御厨研究室内外の研究者・実務家を集結させた「先端公共政策研究室」を立ち上げる →御厨貴が, 都立大学, 政策研究大学院大学時代からこの10年間推進してきた「オーラル・ヒストリープロジェクト」では, テーマ別オーラル (「内閣法制局」研究, 「内閣」の研究を追究する) 他, 大学院レベルの人材養成のため「オープンスクール夏の学校」, 開催先端学際工学専攻教科目として「オーラル・ヒストリー — 講義・実習・政策 —」を開講 (学習院大学大学院政治学研究科と連携しての運営) これらに関連して, OHのテキスト批判を目的とする「クリティークの会」発足 大原『証言 占領期の左翼メディア』 後藤春彦『まちづくりオーラル・ヒストリー』
2006	大河原良雄『オーラルヒストリー日米外交』 日口歴史を記録する会『日露オーラルヒストリー』 大阪外国語大学グローバル・ダイアログ研究『傷みと怒り 圧政を生き抜いた女性のオーラル・ヒストリー』
2007	文理融合型研究プロジェクト『デジタル・コンテンツ&アーカイブ プロジェクト』が御厨研究室, 広瀬研究室, 堀研究室との連携のもと, スタート

筆者作成

まず政治史においては, 1920年代の「明治文化研究会」, 1940年の「憲政史編纂会」, 1960年代半ばから発足した「木戸日記研究会」, 「内政史研究会」を中心に研究の蓄積がなされてきた。発展のきっかけは, 1995年に発足した「戦後政策回顧研究会」を母体に, 1997年に政策研究大学院大学政策情報プロジェクトが設置されたことにある。政策研究大学院は, オーラル・ヒストリーに全てをかけたといっても過言ではない伊藤隆を教授として, その後のプロジェクトを引き継ぐ御厨貴 (当時, 都立大学教授) を客員教授として迎え入れた。1999年に御厨は, 政策研究大学院の教授に移籍し, 翌2000年には文部科学省の拠点形成プログラムによるC.O.E.オーラル・政策研究プロジェクトを立ち上げ, 今日に至るまでオーラル・ヒストリーの発展に精力的に務めてきた。C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクトは, 5年という期間のうちに, 主に政治家, 官僚を中心に, 行政, 法曹, 経済, 労働, 海外進出, 阪神淡路大震災, 沖縄問題などについて150人以上, 1000回あまりのオー

ラル・ヒストリーを蓄積し成果を刊行している。御厨は、2003年に東京大学先端科学技術研究センター教授に移籍し、政策大学院での蓄積を受ける形で、東京大学先端科学技術研究センターを中心にオーラル・ヒストリープロジェクトを立ち上げ、テーマ別のオーラルを追究するほか、人材養成のための科目開講、オーラル・ヒストリーのテキスト批判を目的とする「クリティークの会」を発足させるなど、引き続き精力的な活動をおこなっている。

生活史において、ライフヒストリー研究の発端となったのが『口述の生活史』（中野 1977）である。同著は、口述にもとづいた生活の領域における歴史研究という意味から、日本におけるオーラル・ヒストリーの流れに位置づけていいといえるだろう。生活史、ライフ・ヒストリーについては、前述している。

労働運動史の中心となったのは、大原社会問題研究所と労働政策研究・研修機構（略称JILPT、旧日本労働協会、旧日本労働研究機構、以下JILPTと表記する）である。大原社会問題研究所におけるオーラル・ヒストリーへの取り組みについては、吉田の論文で詳しく述べられているのでここではJILPTについてのみふれておく。JILPTは、1986年に「戦後の労働政策の変遷と労働運動に関する研究会」を発足させ、すでに存在する主な証言資料を検討し、可能な限りの関係者への聴き取りをおこない、その成果を1989年に記録として発表している。また1992年より「戦後労働組合運動の証言研究」を開始した。1998年には戦後日本の労働組合運動の代表的指導者の一人として、総評労働運動をリードし、春闘方式という世界にも通用する運動を構築した元総評議長太田薫氏からの聴き取りを実施し、翌1999年に公表している。

学界の動きとしては、東京大学先端科学技術研究センターを中心に「日本オーラルヒストリー協会準備室」が設置された2003年という同じ年に、オーラル・ヒストリーやライフ・ヒストリーの実践者や研究者が中心となり「日本オーラル・ヒストリー学会（JOHA）」（会長：桜井厚）が設立された。また、日本政治学会は2004年度の『年報政治学』の特集テーマとして「オーラル・ヒストリー」を設定した。

このように日本におけるオーラル・ヒストリーは政治史、生活史、労働運動史の3つの領域において発展してきており、トンプソンが指摘するように、「日本においては、オーラル・ヒストリーへの情熱が低かった」とは言えない。しかし、トンプソンが『記憶から歴史へ』を著したのは1978年であり、日本におけるオーラル・ヒストリーは、1980年代以降に発展したことから、トンプソンの指摘は、当時の判断としては正しかったといえるだろう。

では、日本のオーラル・ヒストリーを牽引してきた政治史においてオーラル・ヒストリーはどのように定義されているのだろうか。「はじめに」でふれたように、御厨は、「公人の、専門家による、万人のための口述記録」（御厨 2002：5）と定義している。この定義に対して飯尾は、「対象を限定することで、オーラル・ヒストリーを政治史の枠内におき、その成果をそのまま政治学の成果であるということを可能にする。こうした主張には、伝統的な政治史が文書資料、とりわけ日記・手紙といった一次文書資料を偏重することに対して、異議を申し立て、同じ土俵で議論を展開しようとする意図がある。また対象を限定することによって、日本における関係資料の保存体制の弱さや、行政資料などの文書管理・情報公開体制が未整備であることを厳しく指摘する意味合いもあり、オーラル・ヒストリー定着のために重要な意味を持っていた」（飯尾 2005:22）と一定の評価をしてい

る。しかし飯尾は、「すでにオーラル・ヒストリーが関係の研究者にとって市民権を得たと見られる現状においては、分野の違いを超えて交流を進めるべきではないか。とりわけ、アイデンティティ・ポリティクスなど、政治学の領域は広がり、従来より広い範疇の人々を研究対象とするようになると、いわゆる『公人』ではない人々に対する聞き取り、その記録としてのオーラル・ヒストリーが重要になるとも考えられる」（飯尾 2005:22）と主張する。この主張に御厨自身も理解を示していると判断できる。御厨は『年報政治学』の特集「オーラル・ヒストリー」の巻頭で、「この10年間で急速に『オーラル・ヒストリー』が市民権を得たことを考えると、公的体験を有する人のみならず、いわゆる庶民や名もなき人にまで、改めて対象とする人々の背景を広げてよいと今では考えている」（御厨 2005：iii）と述べている。つまり、日本におけるオーラル・ヒストリーは、政治史の領域において一定の成果をあげた結果、対象者を生活者、市井の人々にまで拡大する方法論としての確立が求められる段階にきている。そこで問題となってくるのは、社会学をはじめとする近接領域との関係である。ここでは筆者の専門である社会学とオーラル・ヒストリーの関係について検討していく。

3 ライフ・ヒストリーの意義と課題

(1) ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーの接近と違い

清水は、日本におけるオーラル・ヒストリーの歴史的経緯からみて、目的、研究対象によって二系統に大別している（清水 2003）。まず、一つは政治家、官僚など公的な地位にあったものの記憶を国家の財産として残す作業としての「エリートオーラル」とも呼ばれるものである。これに対して、二つめはそもそも歴史に残りにくいマイノリティ、技術者、女性などを対象としたオーラル・ヒストリーである（清水 2003:1-2）。後者については、タイトルが（2）「エリート・オーラルとライフストーリー」となっていることから、清水は「ライフストーリー」として位置づけていると考えられる。また桜井は、ライフストーリーとオーラル・ヒストリーの違いについて、「その焦点を合わせる局面と範囲に違いがある。オーラル・ヒストリーは、個人の人生経験における特定の局面に注目する。『歴史的再構成の目的で、過去のある出来事の現場にいたり、その出来事に参加したりした人へのインタビュー』（Crele 1996）」（桜井 2002:62）であるとしている。これらのことから、オーラル・ヒストリーとライフストーリーの違いは、目的や研究対象の違いから生じてくるとらえてはば間違いないだろう。

しかし、これまで述べてきたように、オーラル・ヒストリーの研究対象が「公人」から「生活者、市井の人々」に拡大する段階にきていることから、研究対象の違いからくる区別はなくなってくると思われる。両者を区別するものとして残ってくるのは目的となる。オーラル・ヒストリーの目的は歴史的再構成にある。それにたいしてライフ・ヒストリーの目的は、構造主義においては、社会構造的関係のパターンをあきらかにするためのデータのひとつであり、社会構築主義においては、<いま-ここ>で語り手と聞き手の相互行為によって構築されるストーリーそのものに焦点をあて、社会現象を理解・解釈する共同作業に従事することにある。この目的の違いが、冒頭にのべた歴史学において一定の市民権を得たオーラル・ヒストリーと、社会学において市民権を得つつあ

る、つまり市民権を得る途上にあるライフ・ヒストリーとの違いに関連してくる。

オーラル・ヒストリーの目的は歴史的再構成にあり、オーラル・ヒストリーという新しいアプローチは、ドキュメントとして残された史料だけではなく、史料を新しい方向からみることが可能にすることをあきらかにしてきた。オーラル・ヒストリーの利点は、複雑で多面的である現実にたいして、複眼的な視点から歴史を再構成することにある。オーラルという手法を用いることにより、既存の歴史から見落とされてきた人々、たとえば貧困層、非特権層、打ち負かされた人々の証言を得ることにより、より公平な歴史的判断が可能となってきた。そこにオーラル・ヒストリーの意義がある。その意義についてトンプソンは、「歴史は民主的になっている」と端的に表現する(Thompson 1978 [2002] :27)。

オーラル・ヒストリーが一定の市民権を得ているのにたいして、ライフ・ヒストリーが市民権を得る途上にあるのはなぜか。ライフ・ヒストリーの目的が、生活の領域における史料の提示にあるならば、一定の市民権を得られている状況にあるといえるだろう。しかし社会学の目的は、社会構造をあきらかにするために社会的現実を再構成することにある。そのために、歴史的な視点からの時間軸と、社会的な視点からの空間軸をクロスさせて社会をみていくアプローチが必要となる。そこで、口述によって得られた資料（データ）をどう解釈し、記述するかが問題となってくるのである。

（2）ライフ・ヒストリーにおける解釈の問題

口述によって得られた資料（データ）をどう解釈し、記述するかの問題について、本稿では解釈に焦点をあてて検討していく。ここで1 - （2）「ライフ・ヒストリーとライフストーリー」でふれた『ライフヒストリーの社会学』（1995）の編者である中野と桜井の議論に戻ることにする。両者は、歴史社会学者と社会問題の社会学者であるという立場が異なるだけでなく、ライフ・ヒストリーとライフストーリーの捉え方についても異なる見解をもっている。両者の議論の中心は、デンジンが主張する「ライフヒストリーがライフストーリーであるがゆえにフィクションである」（Denzin 1989a, 1989b）という批判、つまりライフストーリーの信憑性についての捉え方にみられる。中野は、以下のように主張する。

歴史記述もまた当然「絶対的に客観的な事実」の再現などではありえないが、歴史的現実を記述した作品として相対的に信頼できる確かさ（信憑性 *authenticity*）が要求される。個人史の場合、本人が自己の現実の人生を想起し述べているライフストーリーに、本人の内面からみた現実の主體的把握を重視しつつ、研究者が近現代の社会史と照合し位置付け、註記を添え、ライフヒストリーに仕上げる。本人が内面からとらえた個人の現実はもとより本人の現在の視点から述べられるが、研究者が解釈し編纂し、また分析するのも研究者自身の、同様に現在の視点に立ってなされる。現在の視点に立ってなされるからといって双方とも、それゆえにフィクション（虚構）と見なすのは誤りである（中野 1995:192）。

この主張に対して、桜井は一定の理解を示したうえで、デンジンと中野のフィクションの理解についての違いに問題のひとつがあると、以下のように指摘する。

中野は、フィクションを「作為的な歪曲」あるいは「恣意的な歪曲や創作」と同じものと考え、だからこそライフストーリーをフィクションとみなすことに反対している。それに対しデンジンは、フィクションはなにかしら経験から作られており、しかも心理と対立するものではないとし、「起こったこと、何かを意味することについての、観察者や調査対象者の説明をふくむという意味において、あらゆる解釈はフィクションである」(Denzin [1989a=1992:216])という。ここで、すべての解釈がフィクションであるとデンジンが主張するのは、方法論的なふくらみからである。それは、調査者(研究者)が集団や個人について客観的に説明したり、他者の現実を自分の解釈でおきかえたりする様式から自由になって、語りの聞き方を学びかつ解釈のさまざまな表現をおこなう方法をうながすためである。すなわち「研究される世界を見る解釈の窓を広げる」[Idid:217] ためなのである(桜井 1995:239)。

桜井は、デンジンがすべての解釈がフィクションであるというデンジンの主張を方法論的な視角からであると理解し、中野の方法論について「その方法論的な主張の行き着く先は、主体の経験が出来事や実際の生としっかりと結びついており、語りが歴史的社会的現実のあるパターンを表していることが前提とされているから、生活状況につきまとっているあいまいさや矛盾や主体の開かれた可能性などは、調査者/研究者のテキスト構成の過程で失われてしまいかねない」とする(桜井 1995:241)。さらに「調査者/研究者は、ライフストーリーのテキストへの翻訳作業を通してそうした現実構成のあり方のちがいをしばしば消滅させてしまいかねない」と主張し、編集における「自伝的真相」の語りの過小評価や排除、時系列的編集などの問題点はそこにあると指摘する(桜井 1995:244)。このような考え方が、語られる出来事や経験の内容よりも、<いまーここ>で語り手とインタビュアーの双方の「主体」が生きていることが重要であり、語られた内容の背後にあると想定される客観的な社会構造や歴史的事実と照らして真偽をチェックする必要がない、と主張する社会構築主義へとつながっている。しかし、このようにインタビューの場こそが、ライフストーリーを構築する文化的営為の場であると考える立場は、挑発的な表現を用いれば、「木を見て森を見ず」という状況を生み出すと筆者は考える。語られた内容が、たとえ歴史的な事実と異なっても、それをその時代を生きた語り手/主体の歴史の多元性としてそのまま受け入れるのではなく、歴史的事実とは異なることをあきらかにしたうえで、「なぜ語り手/主体が歴史的事実と異なる事実を語るようになったのか」というプロセスに目をむけるべきであると考え。このような考え方は、「生きられた生」、「経験された生」そして「語られた生」を区別することによってあきらかになってくる。この、「生きられた生」、「経験された生」、「語られた生」について中野は以下のよう述べている。

デンジンがブルナーを引用するように「生きられた生」と「経験された生」と「語られた生」を区別することは賛成で、そのとき「経験された生」の全てが記憶され続けるわけでもなく、回想されうる全てが語られるわけでもないから、「語られた生」と「経験された生」の区別は勿論大切としても、同様に、生きられた生における直接経験の記憶と、回想された生の経験、つまり過去の経験の回想との区別も必要である(中略)「語られた生」は、「経験された生」つまり「生きられた生についての経験」の記憶が、回想され「語られる」のであって、「生の現

実について語られたこと」をフィクション（虚構・創作）と同一視したのはデンジンの誤りであった（中野 1995：203）。

中野は、「ライフストーリーが文学作品ではなく、ライフヒストリーとされるとき編者たる研究者は『真偽』つまり『歴史的事実とみなしうる信憑性』の有無に注意を払う必要がある」（中野 1995：204）と主張するが、筆者もこの主張に同意する。

またストーリーと歴史の関係のあいまいさについて、リアリストとアンチリアリスト（テクスト派）の間での論争がある。アンチリアリストは、〈ほんとうに生きられた〉ヒストリーという言葉は意味がないと主張し、一人の人のヒストリーの客観的なリアリティを否定し、知りうる唯一のリアリティが、（〈テクスト〉としてみなされる）言説それ自身によって構成される言説的リアリティにあるとみている。それにたいしてリアリストは、ライフストーリーが（客観的にそして主観的に）ほんとうに生きられたヒストリーに迫る描写を構成すると断言している（Bertaux 1997 [2003] :31）。

このように多様な立場、主張の存在は、方法論を構築していくうえで、ときに実り豊かに、ときに袋小路にはいりこむという二面性をもっている。袋小路にはいりこまないためには、量的研究と質的研究、実証主義と対話的構築主義、構造主義と社会構築主義、リアリストとアンチリアリストという二項対立の図式や、歴史学と社会学といったような学問領域の対立を打開する必要がある。その方法のひとつとして、ベルトーは、エスノ社会学的なパースペクティブを用いることを主張した。ベルトーは、このパースペクティブの特徴と目的を以下のように説明する。

このパースペクティブは断固として客観主義的であり、その目的は、孤立した一人の人の価値システムや表象の図式を内部からとらえるものでもなければ、一つの社会集団の価値をとらえるものでもなく、社会-歴史的なリアリティの個別の断片や社会的対象を研究することにある。すなわち社会関係の配置やメカニズム、プロセス、社会的対象を特徴づける行為の論理に強調をおきながら、社会的対象がいかにか機能するのか、いかにか変化するのかをとらえることである。このパースペクティブでライフストーリーをもちいることは、統計や法規の文書、あるいは〈中心的な〉位置を占めるインフォーマントとのインタビューあるいは行動の直接的な観察のようなその他のソースを排除するものではない（Bertaux 1997 [2003] :33）。

エスノ社会学的なパースペクティブの基本的な考え方は、「社会的世界あるいは中宇宙全体を規定する論理が社会的世界を構成する小宇宙でもそれぞれおなじように働いている」という仮説の設定にある（Bertaux 1997 [2003] :40）。しかし、「一つの小宇宙のみを研究することは、一つのタイプだけに固有の特徴を社会的世界にあやまって一般化するように導くことになる」（Bertaux 1997 [2003] :40-41）という危険性を認識したうえで、ライフストーリーを〈繰り返し〉収集し、分析し、〈飽和のプロセス〉を確認することの必要性を説く。ベルトーは、このパースペクティブを用いた実証的研究の積み重ね、社会構造的関係のパターンをあきらかにするとともに、ライフストーリーを用いる研究の有意性をもあきらかにしてきたのである。筆者は、それだけでなくベルトーが、学際的な研究をおこなうことにより成果をあげていることにも注目する。それが、オーラル・ヒス

トリー研究の第一人者であるトンプソンとの共同研究、『社会移動への質的アプローチ』(*Pathway to Social Class: A Qualitative Approach to Social Mobility* 1997) である。

この研究は、複数のライフストーリーを収集することによりケースヒストリーを構築していくというライフ・ストーリーの手法と、口述により史料を収集するオーラル・ヒストリーの手法を融合することにより、異なる家族において、世代を通じて繰り返されたかもしれない、文化のパターンと感情のあり方という両面で階層移動をみていくことを可能にした (Bertaux & Thompson 1997:13, 22)。しかし、最初からライフ・ストーリーとオーラル・ヒストリーの手法の融合がはかられていたわけではなく (当初、トンプソンはライフストーリー・インタビューの方法を用いることに反対していた)、両者が長期間にわたる複数のプロジェクト研究をおこないながら方法論の議論も深め、この方法論の有意性をあきらかにしていったのである (Bertaux & Thompson 1997:21-22)。この共同研究は、学際的に研究をすすめ、理論化することの難しさと有用性をしめすとともに、日本においてライフ・ヒストリーやオーラル・ヒストリーに携わる研究者が考えるべきことを示唆している。もし日本において、ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーを融合した方法による研究プロジェクトが学際的にすすめられ、日本の階層移動をあきらかにすることが可能となれば、それはSSM調査をはじめとする量的研究とあわせて、より実態にちかい社会的現実を再構成することが可能になる。ライフ・ヒストリーの強みは、個人の視点および個人の主体的な力をみることを可能にすることにあることから、トンプソンの言葉をかりるならば、ライフ・ヒストリーという新しいアプローチの発展は、「社会構造の分析がより民主的になる」ことにつながっていく可能性を秘めている。

(3) ライフ・ヒストリーの方法論の確立にむけて

本稿では、まずライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリー研究の系譜を理解することに重点をおいた。その結果、ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーの接近 (研究対象者) と違い (目的) を明確にすることができた。ライフ・ヒストリーは、フィールドワークの伝統が根づいているところ、学際的な交流がなされた研究分野で発展していく可能性がある。学際的な交流をすすめるうえで取り組むべきことは、各領域におけるアプローチをあきらかにし、相互にその有用性と課題をあきらかにすることにある。またライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーに共通する方法としてインタビューがあるが、インタビューについてはライフストーリー・インタビュー、ナラティブ・インタビュー、対話式インタビュー、深いインタビュー、ヒアリング、といった多様な表現が使われている。そこでまず、インタビューの方法について吟味していく必要がある。そうすることにより、「生きられた生」、「経験された生」、「語られた生」、ストーリーとヒストリーの関係、語り手と聞き手の関係、そしてその主体について、より明確にしていくことが可能になってくる。さらに、得られたデータの記録、分析、解釈、記述、そして記録の公開性についてあきらかにしていく必要がある。このように、課題は多い。課題は多いが、ライフ・ヒストリーはその多くの課題に取り組み、あきらかにしていくことにより、方法論として確立していただくだけの意義があると筆者は考える。

おわりに

本研究から、ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーを融合した方法論の有用性があきらかになった。その場合、見いだされた方法論は、あらたな概念としての言葉をあてはめることが必要になってくるかもしれないが、ここではひとまずライフ・ヒストリーとしておこう。ライフ・ヒストリーは、社会学、歴史学だけでなく、人類学、心理学、教育学など、その方法論を用いることが有用な領域が多くあると思われる。また、社会史、文化史、政治史、ライフコース論、キャリア論、戦争の記憶、性別役割分業や日本的経営などの支配的な構造の解明、ジェンダーによる差別、老人、女性、移民などの社会的マイノリティーの領域等、表象からみる研究だけでなくライフ・ヒストリーを使った研究が果たす役割には多くの可能性が秘められている。さらに、語り手が主体的に歴史や構造にかかわる視点をもつ運動としてライフ・ヒストリーを展開することにより、特権をあまりもたない人びと、年老いた人びと、働いている人びと、地域に生きる人びとに尊厳と自信をもつことを助けることによる主体性の回復や、教師と生徒の、世代間の、階級間のそして研究機関と一般社会やコミュニティの壁をなくすといった、教育的な効果や相互理解をも生み出すだろう。なぜなら、歴史も社会も、主体性をもつ一人一人によって作られているからである。だからこそ、個人の視点および個人の主体的な力を重視するライフ・ヒストリーというアプローチは、多くの領域で有用である。その点からも、学際的に共有できる方法論の確立が求められている。そのためには、個人でのライフストーリー収集には限界があることから、プロジェクトによる、しかも学際的なプロジェクトによるライフ・ヒストリーの実証的研究の積み重ねと、方法論についての議論を深めていくことが必要である。

（えとう・せつこ 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）

【引用文献】

- Anderson, Nels., 1923, *The Hobo: The Sociology of Homeless Men*, The University of Chicago Press. (=1999, 2000 広田康生訳『ホーボー——ホームレスの人たちの社会学（上）（下）』ハーベスト社.)
- Bertaux, Daniel., 1997, *Lés Recits de vie: Perspective Ethnosociologique*, NATHAN/HER, Paris. (=2003, 小林多寿子訳『ライスストーリー——エスノ社会学的パースペクティブ』ミネルヴァ書房.)
- Bertaux, Daniel, and Thompson, Paul., 1997, *Pathways to social class: a qualitative approach to social mobility*, Oxford University Press.
- Denzin, Norman, K, and Lincoln, Yvonna, S., 2000, *Handbook of qualitative research*, 2nd edition, Sage Publications, Inc. (=2006, 平山満義監訳, 藤原顕訳『質的研究ハンドブック 2巻』北大路書房.)
- Denzin, Norman, K., 1989a, *Interpretive interactionism*, Sage Publications, Inc. (=1992, 片桐雅隆他訳『エビファニーの社会学—解釈的相互作用論の核心』マグロウヒル.)
- Denzin, Norman, K., 1989b, *Interpretive Biography*, Sage Publications, Inc.
- Holstein, James, A, and Gubrium, Jaber, F., 1995, *The Active Interview*, Sage Publications, Inc. (=2004, 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳『アクティヴ・インタビュー——相互行為としての社会調査』せりか書房.)
- 飯尾潤, 2005, 「政治学におけるオーラル・ヒストリーの意義」『年報政治学2004』21-33.

- 御厨貴, 2002, 『オーラル・ヒストリー 現代史のための口述記録』中央公論新社.
- 御厨貴, 2005, 「特集にあたって」『年報政治学2004』iii - vii.
- Mills,Wright,C.,1959, *The Sociological Imagination*, Oxford University Press. (=1965 [1995], 鈴木広訳 『社会学的想像力』紀伊國屋書店.)
- 水野節夫, 1986, 「生活史研究とその多様な展開」青井和夫監修／宮島喬編『社会学の歴史的展開』149-208, サイエンス社.
- 武笠俊一, 2003, 「生活史の複合への期待」『中野卓著作集生活史シリーズ 第1巻 生活史の研究 会報1』1-3.
- 中野正大・宝月誠編, 2003, 『シカゴ学派の社会学』世界思想社.
- 中野卓, 1977, 『口述の生活史——或る女の愛と呪いの日本近代——』御茶の水書房.
- 中野卓・桜井厚編, 1995, 『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.
- 中野卓, 2003, 『中野卓著作集 生活史シリーズ 第1巻生活史の研究』東信堂.
- 日本政治学会編, 2005, 『年報政治学2004 特集オーラル・ヒストリー』岩波書店.
- Punch,Keith,F.,1998, *Introduction to Social Research : Quantitative and Qualitative Approaches*, Sage Publications Ltd. (=2005, 川合隆男監訳『社会調査入門 量的調査と質的調査の活用』慶應義塾大学出版会.)
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井厚・小林多寿子編, 2005, 『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房.
- 清水唯一朗, 2003, 『日本におけるオーラル・ヒストリー ——その現状と課題, 方法論をめぐる』(KEIO-GSEC CRONOS WPs 03-004) .
- Shaw,Clofford,R.,1930, *The Jack-Roller A Delinquent Boy's Own Story*, The University of Chicago Press. (=1998, 玉井眞理子・池田寛訳『ジャック・ローラー——ある非行少年自身の物語』東洋館出版社.)
- 谷富夫編, 1996 [1999], 『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社.
- Thompson,Paul.,1978, *The Voice of the Past: Oral History*3rd Edition, Oxford University Press. (=2002 [2006], 酒井順子訳『記憶から歴史へ——オーラル・ヒストリーの世界』青木書店.
- Thomas,W,I and Znaniecki,F.,1918-20, *The Polish Peasant in Europe and America*, Reprinted, Dover. (=1983, 桜井厚部分訳『生活史の社会学』御茶の水書房.)
- 山田富秋編, 2005, 『ライフストーリーの社会学』北樹出版.